

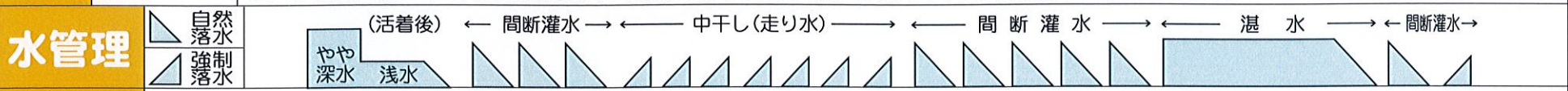
令和6年産 水稲 おいでまい 栽培しおり

J A 香川県東讃営農センター
監修:香川県東讃農業改良普及センター

■稲わらや麦わらは焼かずにすき込みましょう。■毎年種子更新100%に取組みましょう。

■農薬使用の際は、「農薬使用基準」を遵守し、栽培履歴を正確に記帳しましょう。

生育相											
	活着時期	茎が増える時期	茎の増加を抑える時期	穂ができる時期	穂が大きくなる時期	穂に実が入る時期					
作業	移植日	間断灌水開始 (移植15日後頃)	中干し開始	けい酸加里施用 (出穂35日前頃)	中干し終了 (出穂30日前頃)	穂肥Ⅰ施用期 (出穂18日前)	穂肥Ⅱ施用期 (出穂10日前)	出穂期	収穫期		
	移植時期別の目安	6月20日 (5月31日播種) 6月25日 (6月5日播種) 6月30日 (6月10日播種)	7月 5日	7月20日	7月23日	7月30日	8月11日	8月19日	8月29日	10月10日	10月12日
品種特性と栽培の留意点	○地力の低下は、収量や品質の低下を招くので、稲わら・麦わらのすき込みや土壌改良資材の施用をしましょう。 ○分けつが旺盛なため、植付本数が多いと過繁茂となるので、1株当たりの植付本数は3~4本にしましょう。 ○生育初期は葉色がうすめに推移するので、過度の施肥はしないようにしましょう。 ○干しすぎは、根を傷めて収量・品質を落とすので、適切な水管理を行いましょう。 ○いもち病に弱いので、育苗箱防除、本田防除は必ず実施し、発生が見られたら確認防除を行いましょう。										



作業	時期	回数	留意点
1 必須防除	移植	1回	病害虫防除基準参照
2 必須防除	間断灌水	2回	7月上旬中にいもち病常発地では必須防除2回目を(2~3日湛水、2~3日落水)実施する。
3 必須防除	中干し終了	3回	丈夫な根を維持する。出穂30日前頃には終了し、間断灌水を再開し、出穂35日前頃に施用する。(施肥基準参照)
4 必須防除	収穫	4回	稲摺は乾燥後一昼夜以上経過したのちに行う。玄米の仕上がりが水分は14.5~15.0とする。適期収穫に努め収穫後は3時間以内に乾燥に移す。籾の85~90%が黄変したら刈り取る。すぎないように走り水を行う。収穫作業に支障のない限り遅らせ、落水後も田が乾きクサネムは収穫前に抜き取る。

栽培管理

初期除草 間断灌水 中干し開始 中干し終了 穂肥Ⅰ施用 畦畔管理 穂肥Ⅱ施用 湛水管理 落水 (走り水) 収穫 乾燥 調製

代かき 基肥 土づくり 育苗

代かきはできるだけ均平になるように行う。大きなヒビ割れができる。施肥基準参照。土壌改良資材を施用する。(施肥基準参照) 健苗つくりを努める。別紙、水稲育苗のしおり参照

雑草防除基準

散布時期・回数	除草剤名 10a当たり処理量	注意事項
移植直後~9日 ノビエ2.5葉期まで (移植後30日まで/1回)	ラオウジャンボ 小包装(パック)10個(250g)	①1キログラムは育苗箱施用剤との誤使用を避けるため、別に保管しラベルの使用上の注意事項を守る。 ②薬害を生じる恐れがあるので、散布後に補植(田直し)はしない。 ③散布後、暑い高温が続く場合、白化や初期生育抑制等を生じる場合がある。 ④散布後3~4日間は水深3~5cmを保つ。また、散布後少なくとも7日間は落水、かけ流しはしない。 ⑤軟弱苗、極端な浅水田、漏水田では薬害の恐れがあるので使用しない。 ⑥多量散布、重複散布はしない。 ⑦ジャンボ剤は水深5~6cmの湛水状態で、パックのまま投げ入れる。なお、水面に浮草、藻類の発生が多い時や強風時には、薬剤が拡散しにくく薬害がでやすいので、エンペラー1キログラム剤を使用する。 ⑧フロアブル剤は3~5cmの湛水状態で手振り散布を行う。
移植直後~9日 ノビエ2.5葉期まで (移植後30日まで/1回)	カチボシフロアブル 500ml	
移植時(田植同時散布)~ ノビエ3葉期まで (収穫60日前まで/1回)	エンペラー1キログラム剤 1kg	
移植後7日~ ノビエ3葉期まで (収穫30日前まで/2回以内)	クリンチャー1キログラム剤 1kg	ノビエのみ
移植後25日~ ノビエ4葉期まで (収穫40日前まで/2回以内)	クリンチャージャンボ 小包装(パック)30個	
移植後20日~ ノビエ4葉期まで (収穫50日前まで/2回以内)	クリンチャーバスマE液剤 1,000ml、水70~100ℓ	ノビエ及び広葉雑草
移植後20日(稲5葉期以降)~ ノビエ4葉期 (収穫60日前まで/1回)	ツイゲキ豆つぶ250g 250g	
発生初期 (収穫45日前まで/3回以内)	モグトン粒剤 2~3kg	ウキサ・アオミドロ、表層割離の発生初期に散布する。

施肥基準

●土壌改良資材等 (kg/10a)

資材名	総量	基肥	出穂35日前頃
粒状くろがねシリカ	100	100	—
ユーキ鉄ケイカル	100	100	—
シリカサポート1号	60	60	—
苦土一番	40	40	—
けい酸加里	20(40)※	(40)※	20

※けい酸加里を基肥で使用の場合は、10aあたり40kgとする。

●基肥・穂肥の施用基準(基肥は全層施肥の施用量を示す。)(kg/10a)

肥料名	窒素-リン酸-加里 N-P-K(%)	総量	基肥			備考
			穂肥Ⅰ (出穂18日前)	穂肥Ⅱ (出穂10日前)	備	
おいでまい一発	18-10-12	40(35)	40(35)	—	基肥1回施肥	
スーパーブレンドLP40	14-14-14	55(50)	30(25)	25	基肥と穂肥の2回施肥	
硫加燐安402	14-10-12	60(55)	30(25)	20	基肥と穂肥の3回施肥	
朝日BB488	14-8-8	60(55)	30(25)	20	基肥と穂肥の3回施肥	

()の数量は側条施肥機を使用する場合

●牛ふん堆肥施用体系 (kg/10a)

肥料名	総量	基肥	穂肥 (出穂18日前)
牛ふん堆肥	1000	1000	—
スーパーブレンドLP40	45(40)	25(20)	20※

()の数量は側条施肥機を使用する場合 ※穂肥の施用は生育状況を見て減肥する。

●穂肥診断基準(出穂20日前)

草丈	葉色板		穂肥Ⅰ施用量
	75cm未満	75~85cm	
75cm未満	4.5未満	4.5以上	基準量の半量
75	4.0未満	4.0以上	基準量の半量
85cm以上	4.5以上	4.5以上	施用しない

※穂肥量は天候や地力に応じて加減します。

病害虫防除基準

防除時期	対象病害虫名	使用薬剤及び10a当たり散布量・回数
必須1回目 いづれが使用	移植まで (緑化期~ 移植当日)	いもち病、ウツカ類、コメカイモチウ Dr.オリゼスターグール粒剤 50g/箱(1回) ※いもち常発地にも効果がない。 ビルターフェルテラチエGT 粒剤50g/箱(1回)
	7月上旬 (いもち病 常発地のみ)	いもち病 葉いもちに対しては 初発10日前~初発時 葉いもちに対しては 初発20日前~初発時 オリゼメート粒剤 3~4kg (収穫14日前まで/2回以内) コラトップジャンボP 小包装(パック)10~13個 (出穂5日前まで/2回以内)
必須2回目 いづれが使用	出穂20~15日前 (粒剤の場合)	いもち病、紋枯病、稲こらじ病、 ウツカ類、カメムシ類 ゴウケツモンスター粒剤 3kg (出穂5日前まで、ただし収穫45日前まで/1回)
	出穂10日前 (豆つぶの場合)	いもち病、紋枯病、ウツカ類、 カメムシ類 ワイドパンチ豆つぶ 250g(収穫35日前まで/1回)
必須3回目 いづれが使用	出穂直前~穂前期 (液剤の場合)	いもち病、紋枯病 カメムシ類、ウツカ類、 ツマグロヨコバイ ダブルカット(ワタフロアブル 1,000倍 100ℓ)(穂前期まで/2回以内) スターグール顆粒水溶剤 2,000倍 100ℓ (収穫7日前まで/3回以内)
	出穂7~10日後 (豆つぶの場合)	カメムシ類、ウツカ類 スターグール粒剤 3kgまたはスターグール豆つぶ 250g (収穫7日前まで/3回以内) スターグール顆粒水溶剤(カメムシ類)2,000倍 100ℓ (収穫7日前まで/3回以内)(ウツカ類)3,000倍 100ℓ
必須4回目 いづれが使用	出穂10~14日後	カメムシ類、ウツカ類、コブノメイガ、 イナゴ類、ツマグロヨコバイ トレボンEW 1,000倍 150ℓ (収穫14日前まで/3回以内)

※出穂直前に粉剤で防除を行う場合は、飛散に注意し下記の薬剤を使用する。
穂いもち、ウツカ類、紋枯病、コブノメイガ、カメムシ類
出穂直前 ダブルカットバリダトレボン粉剤3DL 4kg(穂前期まで/2回以内)

＜確認防除＞(10a当たり)

・スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)	移植後(収穫60日前まで/2回以内)	スクミノン 1~4kg
・いもち病	初発期(収穫7日前まで/2回以内)	ブラジニアフロアブル 1,000倍・100ℓ
・紋枯病、稲こらじ病	出穂25~20日前(収穫30日前まで/2回以内)	モンガリット粒剤 3~4kg
・紋枯病	出穂20日前(収穫30日前まで/2回以内)	リンパー粒剤 3~4kg
・コブノメイガ、ウツカ類、ツマグロヨコバイ	若齢幼虫期(収穫30日前まで/3回以内)	パダントレボン粒剤L 3kg
・コブノメイガ、イネツトムシ	若齢幼虫期(収穫21日前まで/6回以内)	パダントレボン水溶剤 1,500倍・100ℓ

